

「この人この経営」第40回

“いいところ”を見せるだけが情報開示ではありません

琴秀園

金川秀人さん (58歳)

〒679-2142

兵庫県神崎郡香寺町広瀬472

TEL 0792-32-8740

FAX 0792-32-6598

http://www2s.biglobe.ne.jp/gold/

【プロフィール】

(かながわ・ひでと) 1944年、兵庫県香寺町の農家に生まれる。高校卒業後、電気関係の会社に勤務。大阪への転勤をきっかけに就農を決意し、87年より兼業で土耕ハウスでの軟弱野菜の栽培をスタート。試験的に栽培を続けた結果、「45aの農地をフルに生かして採算をとるには、水耕栽培しかない」と決意。91年より水耕栽培施設を導入し、チンゲンサイの栽培を始める。その後春菊に転換。「清浄野菜」のブランド名で市場、ネットを通して販売している。その栽培方法の内容については、小誌No.56～68号に連載の「私のやり方公開します 軟弱野菜の水耕栽培」に詳しい。



長男の聡さん(左)は、物静かで穏やかな青年。常に「強気」で生産・販売に挑む秀人さんとは好対照だ

小規模だから徹底的な合理化を

JR姫路駅から播但線で北へ15分。兵庫県香寺町の香呂駅へたどり着く。この町で春菊とホウレンソウの水耕栽培を手がける金川秀人さんの「琴秀園」までは駅から徒歩で10分ほど。農園へ向かう途中には、家、田んぼ、家、スーパの横にまた田んぼ……農地と宅地が混在している様子が見える。地方都市近郊でよく見かける風景だ。

かつては農村だったこの町も、姫路市のベッドタウンとして、じわじわと都市化が進んでいるらしい。

琴秀園を訪ねたのは、8月の初旬。

ハウス内には腰の高さの水耕ベッドが一面に広がり、その上に白いマットがぎっしりと敷き詰められていた。ベッドはスライド式に移動できるので、畝間がない。幅10mのハウスに1mの通路が1本あるだけだ。

「小規模やから、徹底的な合理化を図らんと」

と、金川さん。敷き詰められたマットには、本来ならば一面にグリーンの中春菊が生えそろうっているはずだった。が、一部は真っ白なまま。何も生えていない。

室温は38℃に達していた。

「苗が高温障害で枯れてしまった。春菊は暑さに弱い。一昨年までは何ともなかったのに、去年、今年と水温が上がってしまった。25℃までなら大丈夫なんやけど、27℃が何日も続いて……」

と、苦渋の表情を浮かべる。それでも、別の水耕ベッドでは、数日後に出荷を控えた春菊が伸び出している。その向こう側では、長男の聡さん(27歳)が、発芽して間もない小さな苗を、ウレタンごとベッドに移植していた。

「土耕なら全滅。土壤消毒をして復帰するの、少なくとも3ヶ月はかかるはず」ベッドの下で静かに流れる水の音。高温や病害虫のダメージを受けても、すぐさま次の栽培に取り組める。水耕特有の立ち直りの早さを物語っていた。

このところ、金川さんを悩ませているのは猛暑だけではない。昨年の狂牛病騒動以来、春菊が欠かせないはずの焼ききや鍋物の需要が、ガタ落ちしたままなのだ。さらに――

「日本ハムの偽装事件でまた肉の消費が落ちるだろうと。仲買人が勝手に値段を3分の1に下げよった。相手も足許を見て叩いてくる。スーパの売値はいつもと変わらんに」

と、怒りを隠さない。猛暑に風評被害、そこから派生する値崩れ……こんな「三重苦」に見舞われるのは、初めてだという。それでも隣のハウスには、春菊とは別の菜っ葉が……ホウレンソウだ。既に次の一手がうたれていた。

限られた農地で最大の利益を

金川さんは、農家の生まれではあるけれど、根っからの百姓ではない。耕地は田んぼが45a。専業でやっていくのは難しいと考え、高校卒業後は電気関係の会社に就職した。

「いずれ定年退職して、年金もらいながら農業やろう」と思っていたのだが、会社の命令で大阪への転勤を言い渡される。自宅から片道2時間。通勤できない距離ではないが、朝8時半に会社に着くには6時前に家を出て、帰るのは夜11時。まるで寝るためだけに帰ってくるような生活である。

実際にそういう生活を余儀なくされているサラリーマンはゴマンといるが、金川さんは、往復に4時間を要する通勤生活が延々と続くのは体もキツイし、”人生のムダ”と考えた。

当時まだ40代。予定より20年ほど早く

会社を退き、本格的に農業を始めることを模索し始めた。

「この面積でやっていくには、米では無理だろう。ゆくゆくは施設栽培にせなかん。限られた農地で最大の利益を上げるにはどうすればいいのか」

まずハウスを建て、土耕で野菜の栽培に着手。いずれ専業に移行する前段階としての兼業時代は4年間続いた。

小規模で効率よく。この課題をクリアする切り札として浮上してきたのが水耕栽培だった。80年代後半、好景気に後押しされ、プラントも農家が導入できる価格に落ち着いてきた時期でもあった。金川さんは、小規模な実験を繰り返す。トマトやキュウリなど果菜類もつくってみ



水耕ベッドはスライド式で移動もラクラク。作業用の通路は1本でOK。限られた面積をフルに生かす

たが、最終的に面積当たりの収量が多いため、多くの場合は軟弱野菜と判断。91年、施設を整えて本格的に水耕でチンゲンサイの栽培をスタートした。設備費は？

「少しづつ増やしてきたから、正確なところはわからん。電気工事士の免許をもつとるから、電気関係と水道工事は自分でやった。反当2000万円ぐらい。今から始めたら回収不可能やね」

バブル期には、消費者の高級志向に後押しされて有利に販売できた水耕野菜も、その後有機栽培が脚光を浴び始める。と、しだいにその優位性が薄れていく。金川さんは価格が低迷した水耕チンゲンサイに見切りをつけ、春菊の栽培を手がけるようになる。

チンゲンサイから春菊へ水耕は究極の有機栽培

金川さんは、小誌の連載の中で、自らが水耕栽培を選んだ理由を、3つあげている。「同一収量を得るのに3分の1以下の労力で済む」「収量面でも単位面積あたり軽く2倍はクリアできる」そして「安全面ではアブラナ科以外の作物はほぼ無農薬栽培が出来る」(2000年9月56号参照)。

アブラナ科のチンゲンサイをやめた理

由はもうひとつ。コナガ等が発生して無農薬では栽培できないことだった。

「1作につき、最低2回は殺虫剤が必要。葉面に穴が空いとつたら、市場がとつてくれへん。1作に2回ということは、出荷のローテーションに合わせると、毎週やらないかん。こっちの体もたへん」

土はなくとも虫はくる。特にハウスが位置するのは、住宅との混在地域。近隣の家には草花が咲き誇っており、家庭菜園やガーデンニングで耐性をつけた虫が、ハウスへ舞い込んでくる。「薬が効かなくて困る。ガーデンニングブームは大迷惑や」

消費者はしだいに味、見た目に加えて「安全性」を強く望むようになっていく。こうしてキク科の春菊への転換を図ったのである。

春菊の栽培過程において、播種から収穫まで、殺虫剤や忌避剤、さらに消毒薬も含めてハウス内には持ち込んでいない。育苗パネルの穴や、送水パイプの先端には緑の苔が生えるほどだ。

パネルから春菊の株を引き抜くと、真っ白い根が現れた。

「比較的連作障害の少ない作物でも、土で3〜4年つくつたら、ガタツと収量が落ちてくる。それを補うために反当たり

30tの有機質を入れないと効果が出ない。ものすごい労力やし、とてもやないが採算はとれん。結局有機栽培の目的は、土を柔らかくしてできるだけ根を伸ばして栄養を吸わせることにある。土もなんにもない中で、根がのびのび伸びていく土に無限に有機質を入れたのと同じ状態です。結局、水耕は究極の有機栽培だと思う」

金川さんはこうして育てた野菜を「清浄野菜」と名づけ、販売している。

生でも食べられる 水耕春菊の可能性

ハウスでベッドから引き抜いた春菊を、そのまま生で食べてみた。

「えっ、これ、本当に春菊ですか？とびつくり。苦味が少なくナマでも平気で食べられる。」

「栄養価は土耕のものと変わりません。生育中のストレスが少ない分、栄養バランスは優れているともいえる」

金川さんが育てているのは、軸が立ち上がる形態になる中葉春菊。軸がない関西タイプに対して、関東タイプと呼ばれている品種だ。いずれにしても「茹でても苦い」という春菊の先入観がガラガラと崩れてしまった。これなら焼きや



播種マットに発芽した苗を、ウレタンスポンジごとベッドに植え付けていく

鍋物以外の料理にも応用できると思う。

「苦味のない春菊なんて……」という

意見もあるだろう。しかし、近年関東では、鍋物の時期になると苦味のある春菊よりも、マイルドな水耕栽培の水菜の方が好まれていて、埼玉県の産地は次々と水菜に切り換えていると聞いた。「マイルドな春菊」は、時代のニーズにマッチしている。その商品特性をちゃんと伝えていけば、広まる余地はある。

「カップラーメンの上に、そのまま乗せてお湯を注げば、若者の野菜不足解消にもなりますよ」

そうだ。水耕野菜は洗わなくてもいいのだ。ズボラな都会の若者や、主婦にもありがたい。大事な接待の席で、野菜に

ついていた土が口の中で「ガリッ」では、すっきり興醒めという心配もない。高級料亭や大人数の宴会をこなす旅館などでも活躍できるはずだ。

予測不能な相場と 市場のシステムに疑問

さて、水耕の可能性やら最近の動向の厳しさを、淡々と語る秀人さんの向こう側で、黙々と作業を続けている青年がいる。長男の聡さんだ。

彼は地元の農業大学を卒業後、神戸の市場へ就職したが、一年半で辞め家業を手伝うようになった。

「もう少し偉うなるまで、流通の現場におつくれたらよかつたんやけど」

と悔しがる父に対し、本人は穏やかに笑うばかりで多くを語らない。どうやら駆け引きの連続で「ズルなこと」も少ない流通の現場が、性に合わなかつたようだ。

「逆にお父さんが市場で働いたら、張り切りそうですね。」

「オレが市場にいたら、今の仲買



一時は猛暑でダメージを受けたものの、見事復活。出荷を待つばかりである

以上に買い叩いてやる（笑）。これは病気や、あつこれは虫がついとる」

そんなバイヤーがいたら恐ろしい限りだが、少なくとも今より納得のいく流通ができるような気がする。実際現場にいる仲買人は、春菊の「関東タイプ」と「関西タイプ」の見分けもつかない人間が多いという。

聡さんが市場で働いたおかげで、流通の現場の裏事情にも詳しくなった。

「産地直送、朝どり野菜も、あれはみんなウソ。みんな一度市場に入ってからスーパーに並んでいる」

そんな流通システムには、父子して不満を感じている。1把100円以上で売れるときもあれば、5円の時もある。実に20倍の開きである。明日の出荷分がいくらになるのか、予測もつかない。「市場にもスーパーにも出荷量と販売数

のデータはあると思うんです。それを連動させて、いつ・どれだけ・何が必要か予測を立てたら、農家もいる分しかつくないし、値崩れも起こさへんに」

現在は、情勢を見ながら姫路と加古川、2つの市場に出荷しているが、既存の流通ルートでは、なかなか荷が空かない。水耕春菊の特性を生かすためにも、ネットを通しての通販に力を入れていきたいと考えている。

これからの農業にド根性はいらぬ

それにしても水耕栽培というのは、立ったまま仕事ができるし、収穫するにもスルリと抜けていくし、後の処理もパネルの洗浄ぐらい。とても「らくちん」に見える。聡さんに聞いてみた。

——体が痛くなることはありませんか？

「肩こりぐらいいかなあ……」

疲労度はデスクワークの人間とあまり変わらないらしい。実はこの聡さん、有機栽培で有名な県内の農家へホームステイに行ったことがあるという。

「ホウレンソウの有機栽培農家でした。朝の6時から夜の6時まで働きつめ。その家では体を動かすのが美德。えらいん(大変なの)が仕事やと」

一方金川家は——

「えらい仕事して金もらうのは当たり前や。楽して金儲ける方が難しい。こんなこというたら、ド根性農家に叱られるけど(笑)」

と語るお父さんは、根っから「ムダ」なことが大嫌い。作業効率をいかに上げていくかを常に念頭に置いて栽培計画を立てている。実際春菊はチンゲンサイよりも単価が低い。それでも収量と出荷に必要な手間を考え合わせた「時間単価」は、春菊の方が高い。無闇に作目を増やさないことも大切だ。どんどんムダを省いて、効率を高めていく——端目には、薬をしようとしているとしか見えないけれど、闇雲にド根性で突っ走るよりずっと長持ちする。またそうでなければ、若い世代はついて来ない。

本物の「情報開示」とは？

金川さんは、早くから自前のHPを立ち上げ、自らの栽培方法について詳細に情報開示している。その内容は綿密で、水耕栽培のノウハウや溶液に関する新発見を専門業者に伝授したこともあるほど。さらに最近では農家初の「1週間品質保証」も実施している。自分の商品に自

信がなければ、できないことだ。それでも、三重苦に見舞われたこの夏、実状は苦しい。

「狂牛病で値崩れを起こして以来、ちつとも値段が上がらん」

もしかすると私は、金川さんが農業を始めて以来、最も大変なときに取材に来てしまったのかもしれない。高温で苗が枯れてしまったハウスを、誰が他人に見せたいだろう。「今は来ないで」と取材を断ることだつてできた筈だ。それでも「いいよ」といつてくれた金川さんの姿勢。これが本当の「情報開示」なのかもしれない。

人は皆、ええカッコしいだから、一番いい時期の一番おいしいものを、自分の



春菊は根つきのまま袋詰めして出荷。1週間の品質保証つき。そのままコップに生け、「キッチンファーム」として楽しむことも提案している

商品として紹介したいに決まっている。ただど年中最高のものがとれるわけはないし、極力ボロは隠したい。だから「ズル」をしてみたくなったりもする。いいときがあれば悪いときもある。悪条件が重なって最低のとき、どれだけ踏ん張って持ち応えているか、そこを包み隠さず見せてもらえたとき、第三者との間に「本物の信用」が生まれるのではないだろうか。

——来年も暑かったらどうします？

秀人…その対策はもう考えてある。冷却パイプを溶液の中に直に通す。それから国産では無理といわれている9月初旬出荷の「プロッコリー」もつくってみたい。苗を涼しい水耕で育てて「9月や」と思わせる。それを土に移して大きくしたらええんや。

——そ、そんなこと、可能なんですか？

聡…さあ。やってみないことには……。

秀人…それが成功したら「夏イチゴ」もやってみよう(笑)。

このお父さん、ちつともメゲていない様子。厳しい状況下にあつても、無駄な労力は使わず「薬」をして、手の内にある駒を生かして何ができるか。サラサラ流れる水音と共に、しなやかでしたたかな「強さ」が伝わってきた。